

問い 10 戦争をなくし、平和を築きあげるにはどうしたらよいですか。

連研中央講師・滋賀教区
漢見 覚恵

私たち念仏者は、戦争をなくし、平和を築きあげることが願いにしています。なぜ平和を願うのかというと、戦争とは理由はなんでもあり人と人が殺し合う行為であるからです。仏教に生きる基本は「不殺生」です。生きものを殺してはならないということを、生きることの基本にしているのです。ですから、仏教徒として念仏者は平和を願うのです。

世界には目を向ければ、今もどこかの国や地域で紛争や戦争が起きています。そして、毎日のように老若男女がそのいのちを奪われています。しかし、私たちはその事実を目のあたりにしながらも、どこかで他人ごとのように感じてはないでしょうか。もし、そうだとするならば、その理由のひとつは、現在この国が戦争状態にない平和な状態だと認識しているからかもしれません。確かに、現在の日本は75年前の先の戦争の終結以来、爆弾投下に怯えるようなことはありません。ですから、海の向こうのはるか遠い国で起きている戦争を知っても、まるで映画を見ているようです。

しかし、私たちにとっての戦争は、決して他人ごとでも過去のことでありません。なぜなら、75年前に終結した戦争は、形の上では終結したけれども、私たちの心の中ではいまだ終結してはいないからです。当時の人たちは、その時の利害や都合によって戦争の終結を宣言しましたが、その爪あとには75年経った今もなお、私たちの暮らしや心の中に消えずに残っています。ただ、その傷あとや影響は当事者でないと分かりにくいだけです。

私が住職を勤める寺院には、近隣の寺院と同じように所属門徒がおられるのに、お寺の法要などにはあまり参拝されないという特徴と課題があります。その大きな原因が、今もなお続く戦争の影響なのです。私たちの寺院は、滋賀県内に600ヶ寺ある本願寺派寺院の中で、たった3ヶ寺だけの「強制疎開寺院」です。1945(昭和20)年、私たちの寺院は市内の大きな工場に隣接していました。この年の春から夏にかけて、私たちの町にも空襲があり、いのちを奪われた人も少なからずおられました。7月初旬のこと、爆撃の的になりやすい町中の大きな建物が空襲を受けた際に、延焼を避けるために周辺の建物をあらかじめ取り壊しておく「強制疎開命令」が当時の県知事から出され、私たちの寺院もその対象になったのです。

その内容は「1週間以内にすべての建物を撤去すること」でした。命令は「建物疎開」ですから、建物を解体してほかの場所に移築せよという意味になりますが、実際には1週間で本堂などの建物を解体して移築することなど不可能です。

結果、その年の4月に全国で結成された地域組織「国民義勇隊（構成員は、地域の年配者や女性、子どもたちが中心）」により、本堂・庫裏・書院・鐘楼・山門・外塀など、すべての建物が引き倒され、その残骸は焚き物の燃料にもこと欠いていた人たちによって持ち去られました。引き倒された後、誰もなくなった境内の瓦礫の山を前に、当時の住職であった私の祖父は、言葉なく茫然と立ちつくしていたそうです。

それから約ひと月後の8月15日、戦争は終結を宣言されました。住む家を失った当時の住職一家は、親戚の家を転々と渡り歩きました。時には、小さな町工場の片隅の四畳半の部屋を間借りして、大勢の家族が肩寄せ合って暮らしていたこともありました。そして敗戦から2年後、寺院の境内地を売却したお金で、借地に建つ平屋の民家を購入して、そこを仮本堂・庫裏として暮らし始めました。しかし、仮本堂といっても、広さは6畳2間。平常は家族の生活空間で、法要時には仮本堂になるといっても、その広さではご門徒は安心してお参りにも来られません。そのような状態が約40年続きました。そして、1987(昭和62)年、ようやく時機が熟して念願の新しい本堂が完成したのではありますが、ご門徒からすれば半世紀近くお寺に参る習慣が無かったものですから、新しい本堂が完成して30年以上経った今もなお、戦前から代々続くご門徒にはお寺参りの習慣が戻って来ないのです。

一度起こした戦争は、形の上での終結後もなお、戦争中と同様に大切なものを静かに奪い続けていきます。ですから、戦争はくりかえしてはならないと思うのです。そして、思い返せば皆さんにも、何かしら今も続く戦争の傷あとがあるのではないのでしょうか。ならば、戦争は決して「対岸の火事」だとは思えないはず。さらには、今の日本がいつ再び戦争状態になってもおかしくないような世界状況下にあることが実感できるのではないのでしょうか。

ある、戦争状態の中にある他宗教の信者が「世界中の戦争をなくせるのは、もう仏教しかない」と言いました。なぜなら、仏教はいかなる理由があっても人を殺すことを許さない「不殺生」を基本とする宗教だからです。だからこそ、今私たち念仏者は仏教徒として、戦争のない平和な世界を築くことを目的として、戦争や平和に対する考え方のさまざまな違いなども互いに認め合いながら、ともに考え、ともに聴き合い話し合い、理解し合っていくのです。さあ、あなたも非戦平和に向けて一緒に考えてみませんか。

問い 10 戦争をなくし、平和を築きあげるにはどうしたらよいですか。

連研中央講師・佐賀教区
波多 唯明

私たちが平和のためにできることは何でしょうか。

「連研」で平和について話し合いを始めるときに多く出てくるものが「難しい」という意見です。誰もが平和を願っているにもかかわらず、いざ平和について問われると「難しい」と身構えたり、考えることをやめてしまっていないでしょうか。

一体何が「難しい」のでしょうか。その理由を尋ねてみると「みんな思想・信条が違うから答えを出すことは難しい」「人間は悪を犯すものだから戦争は無くならない」「問題が大きすぎて私なんかには何ができるのか」といった意見が返ってきます。

ここに「難しい」の正体が隠れています。「平和」と聞くと「みんな」の問題、「人間」の問題、「国」の問題、「大きな」問題というふうに、私から遠い世界の話、国同士の話と捉えてしまい、私自身の話、私の生き方の話になっていかないのです。私一人が考えたところで世界が変わるわけでもないと最初から諦めてしまっているのです。

つまり「難しい」の正体は「平和」と「私」の距離感にあるのです。私たちが平和という言葉の前にして、何となく漠然と掴み所のない、言葉にしにくいもののように考えてしまうのは、私の中にリアリティとしての平和がないからなのです。そこで今私たちに求められるのは、平和について自分自身の言葉で、自分自身の心で考えること。つまり「私にとって平和とは何か」考えていくことなのです。

ノルウェーの平和学者 Johan Galtung (ヨハン・ガルトゥング)さんは、単に戦争のない状態を「消極的平和」、差別や貧困という構造的な暴力のない状態を「積極的平和」と規定しています。

戦後 75 年が経ちました。日本は平和憲法のもと一度も戦争をしていません。消極的平和の観点から見れば、日本は 75 年間平和だったと言えます。

しかし積極的平和の観点から見たらどうでしょうか。差別や貧困はなくなるどころかますます広がってきています。このような状況を果たして本当の平和だと言えるでしょうか。

また、世界に目を向けると、積極的平和どころか消極的平和さえも実現することができていません。日本が戦争をしていなければ、それで平和だと言い切ることができるでしょうか。

私が高校 3 年生の時、教育実習の先生が日誌でクラスの生徒とやりとりをし

ておられました。私も毎日その日の感想などを書き、先生の返事を楽しみにしていました。ある日、特に書くことがなかった私は「今日も平和だなあ」となんとなく書きました。次の日、先生から戻ってきた返事は「僕はそうは思わない」でした。その時私はハッとさせられました。平和とは何か。日本が戦争をしていないことが平和なのか。差別や貧困のあるこの世界が平和なのか。先生の言葉は私にずっと問い続けています。

親鸞聖人は『教行信証』の中で浄土について次のように述べておられます。

「つつしんで真仏土を案ずれば、仏はすなはちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。しかればすなはち大悲の誓願に酬報するがゆゑに、真の報仏土といふなり。すでにして願います、すなはち光明・寿命の願これなり」(『註釈版聖典』 p337)

私が思い計ることのできない阿弥陀如来の不可思議な光のはたらきが届かない場所はない。そのようにすべての命のもとに届いて救いとると誓われた阿弥陀如来の願いが成就し、はたらいているありようを浄土といいます。今・ここ・私のところに阿弥陀如来の願いは浄土のはたらきとして届いているのです。と、私は聞かせてもらっています。

この浄土のはたらきにであうとき、私の生きる方向が示されます。今・ここ・私に届いている阿弥陀如来のはたらきはすべてのいのちに届いています。一人も漏らさずすくいとするという阿弥陀如来の誓願こそ、私たちに平和とは何かを教えてくれています。

では、私たちはどのような生き方ができるでしょうか。二つの言葉を紹介して締めくくりとします。

『法句経』に次のように説かれています。

「敵意ある者どもの間にあつて敵意なく、暴力を用いる者どもの間にあつて心おだやかに、執着する者どもの間にあつて執着しない人、かれをわれは〈バラモン〉と呼ぶ」(『ブッダの真理のことば感興のことば』 中村元訳)

Michael Jackson (マイケル・ジャクソン) さんの

『Man In The Mirror』(Siedah Garrett (サイーダ・ギャレット) 作詞) という曲の中に次のような歌詞があります。

「I' m starting with the man in the mirror. I' m asking him to change his ways. And no message could have been any clearer. If you wanna make the world a better place. Take a look at yourself, and then make a change.」

「まずは鏡の中の男から心を改めさせよう。わかりやすいメッセージだ。世界をより善くしたいなら我が身をふり返り、自分自身から変えていくこと」(小倉ゆう子訳)

み教えにであった私が平和のためにできること。それは誰かを変えることで

はなく、平和とは何か、私はどう生きるか、み教えに問い、尋ね、何ができるか
考え続けること。あなたも一緒に考えてみませんか。